

水辺の表情(十一) 長崎・神の島物語

古屋 陸夫

最近、縁あって神の島工業団地でパート勤務することになった。ところが、この紹介者のH君は私の年齢を確りと把握してなかったようで、私が提出した履歴書を見た採用担当者から「おやおや、この人はもう八十歳ではないですか、大丈夫なの？」とH君に苦情があったようである。H君は折り返し私に電話をかけてきて「あのう、満八十歳まではまだの歳なんでしょう？」と問い合わせがあった。私は「一年はないけど、あと二ヶ月はあるよ！」と言うと、ひと呼吸遅れたが何とか推薦してくれたようで、一週間ばかり後に採用通知があった。

この工業団地内には色々な会社があり、三十年ほど前までは海だった所を埋め立て団地としたそうで、空地の部分が今は草原となり、長年ほつたらかされていた背丈ほどの雑草雑木が生き生きと伸びている。この先一キロほど直進すると海で長崎港の突端になる。

私が居る事務所の側に人口の川があり、この川は一キロ先の海まで伸びている。ところが、海が満ちても海水はこの側の川まで上がってこない。川幅四メートル、見るところ五百メートル位の所まで潮が満ちる時は海水が波立ち、潮の香りが漂っている。

雨の日、それも大雨が降ると雨水と海水がつながるといふ塩梅なのである。この川の役目は草原に降った雨水の排水路となつてい



現在の神の島工業団地寸景
撮影者：片岡勝義(全日本写真連盟会員・長崎歴史文化協会会員)

くり歩いて、川を飛び越え川辺の小高い山へ入って行った。こういう野生のキジなど昔、物語で知っているだけで実際に今まで見たことがなかった。驚きながら地元の人に聞いてみると、早朝によく見かけると言う。「キジの住む神の島」、これだけでも面白い。これも地元の人に尋ねてみると、キジの居る所にはイタチが居ると言う。キジはイタチの好物だそうである。

神の島でキジの情報は別の人からも聞いた。ヤクルトを配達している主婦からである。「キジは黒色の車が好かないんだって。黒色の車で配達する途中、キジ夫婦と思われる二羽が走っている車に飛びかかって、しよっちゅうフロントガラスをつつきに来るんですよ！」と言われた。私は、キジは非常に珍しいと思っていたが、相手の話を聞くとそうでもなさそうであった。

この草原の町・神の島では、街中で見られない自然がまだまだ残っているようである。

(九州文学同人・本会協力会員)

【長崎・光源寺ユウレン話】

盆の十六日といえば、長崎の人達は「光源寺のユウレン」と言う。ユウレンは幽霊の事であり、ある産女(ウグメと言う)が子供が生まれる直前に病死したので、埋められた墓の中で出産した。その赤ちゃんを育てるため、母は墓の中より毎夜幽霊になって、鉛を買いに街の鉛屋まで出かけていった。その幽霊が毎晩一文銭で支払いをしていたが、七日夜の支払いから一文銭が木ノ葉にかわっていたので、鉛屋が不思議に思つて幽霊のあとをついたら、光源寺の墓地の中に消えていた。翌朝、寺の人達が其の墓を掘りおこしたら「赤ちゃん」が育っていたと言う。母子愛の物語である。

其の後話で、鉛屋は麴屋町にあつて「幽霊さんが其の後鉛屋に御礼にきてね、当時は町には井戸がなくて、水に不自由していると幽霊さんに言う」と、町に井戸を造って下さった。今も「ユウレイ井戸」として伝えられている。「その鉛屋の鉛は筑後柳川・大松下の鉛であつた」というので、今も盆の十六日光源寺に行くとお座敷に白衣長髪の幽霊像を中心に各種の幽霊画像があり、帰りには柳川の大松下の鉛がいただけを。(詳しい事は掘田武弘氏編輯の「光源寺ゆうれい話」を読まれるとよい)

る。普段は雨が降らないので日照りが続くと側の川は湿地となり、川底の土石もうつすらと湿った状態が続く。この川を毎日覗き見していると、そこにカニたちが住んでおり、私はこのカニたちを友だちとして思っている。相手はそのように思っていないだろうが、こちらが勝手にそう思っているだけなのだ。カニたちもいつも居るわけではない。冬の十二月から三月までは姿を見せない。四月中頃から蝶や蜂が舞う頃に二匹、三匹ちらちらと姿を見せる。やがて五月も中旬過ぎると十匹、二十匹と数が増え、六月、七月、八月には四十匹ほどと盛大になる。カニは夏が好きなので、八月には今年の春に生まれたカニもそこそこ大きくなっている。普通の腕時計くらいの大きさで、色は土色、まれに赤色も見かけるが二匹しか見たことがなく、数が非常に少ない。

さて、このカニの種類・名前は何と言うのだろうか、地元の人達に聞いてみたが「自分の近くの小川でも見かけるが名前は知らない。」など、あまり関心はなさそうである。

だが、こんな話を聞いた。「自宅に池を持っている人が、池にカニを集めて、エサとして南瓜を一ヶ月ほどやって、そのカニを茹でて食べると甘味があつて美味い！」そうなの！私には食べる機会がなさそうだ。

しかし毎日見ていると、カニと私は知り合いになつていっているのではないかと考える。まあ、こつちが勝手に思っているだけで相手は無表情、迷惑な事かもしれない。大きさは先程の腕時計くらいのものが一番多いが、それ以下の大きさのカニたちもいる。小さなものたちは大豆くらいだが、これは今年生まれたカニであろう、滅多にお目にかかれない大きいのは手のひらぐらいだろうか、それでもこの大きさのカニを私は一度見たきりで、その後見えていない。嫌われたのかもしれない、多分そうなんだろう。

また今年の春、神の島でキジを見た。八十メートルぐらい先を一羽ゆつ

風信

○長崎の八月といえば、九日の「原爆の日」と十五日「お盆の精霊流し」がある。一、原爆の日。私は学徒動員中であり福岡の軍隊にいたので、被爆者にはならなかったが、九月三日軍隊解散の命があり長崎駅に帰着しました。然し其処には何も木冊だけがあり、二人の人が立っておられて、駅前には大きな防空壕の穴が二つばかりありました。

一、さて、お盆の行事は十三日の「墓まいり」に始まり「各家々では出佛壇かざりがなされる」と記してある。

御先祖様は夜の十二時、家に着かれるそうで家内一同玄関に出て「足あらい」の水を用意し、「お帰りなさいませ」と申し上げたそうである。(長崎年中行事記)十五日夜の精霊流しの見せどころは、県庁横の坂を各人・各町自慢のしるし燈籠を先頭に村田の鐘と「ドイ・ドイ」のかけ声に合わせて出来るだけゆつくりと担いで下るところであつたが、現在は船に車をつけてサツと下つてゆくようだ。

○毎週月曜の長崎学講座の前座五分間、健康法などを話して下さる御高評の片伯部先生、「カズオ・イシグロ氏が少年時代、私の近所において僕と一緒に遊んでやったね」と、なつかしげに話して下さった。イシグロ氏と長崎、なにか親しいものが感じられました。

○「長崎天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産に登録された事、実にうれしかった。これは観光目的のため選ぶのではなく、キリシタンの信仰を密かに人知れず守つてこられた信念に大いに学ぶべきものがある事に深く感激させられた。

○長崎検番事務局より、毎月第二・第四の土曜日の午後、出島オランダ屋敷カピタン部屋の二階座敷でその昔、出島の人達が丸山の芸妓衆を招き、大いに楽しんだという「長崎の音曲」を復活、一般に公開して下さる由。但し座席の都合上、参加希望者は出島実行委員会に事前予約して下さいとの事。(参加費一、〇〇〇円、予約〇九五一八二一七二〇〇)

○九州歴史資料館より八月十二日まで、江戸時代末国防のため用意された各地の警備史跡資料の展示。長崎放火山番所絵図・魚見岳場図等あり。

○長崎趣味の陶芸家兼松孝行氏より自作の黒釉白彩の大きな「花入れ」をご寄贈いただいた。早速、受付の机に置き花を入れ観賞させて戴いている。

○今月ご寄贈いただいた書籍

イーズワークス社より、ワークス社特集「楽No.40」長崎の銅座町を中心に丸山方面の古近各種の物語を中心に樂編輯の特色である各種写真が多く掲載されている。長崎の迷宮銅座、銅座の殿様永見徳太郎伝 第九回樂右エ門と歩く丸山・寄合町など(各書店一、〇〇〇円+税)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

